

栗東歴史民俗博物館

特集展示「平和のいしずえ 2012～描かれた戦争～」

平成 24 年 7 月 28 日(土)～平成 24 年 9 月 2 日(日)

ご あ い さ つ

栗東歴史民俗博物館では、栗東市の「心をつなぐふるさと栗東」平和都市宣言をうけて、平成 3 年度から毎年、戦争と平和をテーマとする「平和のいしずえ」展を開催してきました。これは市内外の所蔵者の方々からご提供いただいた貴重な資料を通じ、近代以降の戦争の歴史と戦時下の生活を再現することで、地域の視点から平和について考えようとするものです。

平成 24 年度には「描かれた戦争」をテーマとし、とりわけ現在の栗東市縁出身の日本画家、西田恵泉(1902～1980)が従軍画家として描いたスケッチ類を中心に展示します。西田恵泉は、自らのふるさとである農村を題材とした作品を描き続け、現在の湖国画壇に確かな足跡を残しました。その一方で、アジア・太平洋戦争時にはフィリピン・ルソン島に渡り、戦場の風景や兵士たちを描く従軍画家として活動しています。陸軍省に提出された作品は、その後所在不明となってしまいましたが、スケッチ類は西田恵泉本人によって保存され続けました。

本展では、郷土を愛した画家、西田恵泉が描いた戦場の風景や同郷の兵士らの姿を通して、戦争と平和について考えます。

平成 24 年 7 月 28 日
栗東歴史民俗博物館

解説集

西田恵泉

滋賀県栗太郡大宝村(現在の栗東市)に生まれた西田恵泉は、日本美術学校、京都市立絵画専門学校に学び、大正14年(1925)からは堂本印象に師事している。昭和3年(1928)、第9回中央美術展への「農婦」の入選を皮切りに、帝展、文展、日展への入選を果たした恵泉は、昭和10年(1935)に郷里に戻ると、洋画家野口謙蔵らとともに美術研究団体の結成と組織化を図り、現在の湖国画壇の基礎を築き上げていく。

湖国を愛し、琵琶湖の風景や風物を描き続けたことで知られる恵泉は、昭和18年(1943)から翌年にかけての半年を従軍画家として戦地で過ごした。恵泉は、戦地で描いたスケッチ類を生涯手元に置き、晩年には「戦争絵画展」の開催を企画している。

本展では、郷土を愛した画家、西田恵泉が描いた戦場の風景や同郷の兵士らの姿を紹介する。

・西田能子書簡 1通

(各)25.7 cm × 18.2 cm

昭和19年(1944)1月5日

個人蔵

従軍画家としてフィリピンに滞在中の恵泉に宛てて、妻から送られた手紙。

こどもの様子など、家族の近況などを伝える中に、「珍しい風景なり、兵隊さんの写生も大分出来ました事とさつします」という一文があり、従軍画家としての仕事の一端がうかがわれる。

・西田恵泉画伯従軍後援会 設立趣旨・会規 各1枚

いずれも 22.7 cm × 30.2 cm

いずれも 昭和18年(1943)6月

個人蔵

昭和18年(1943)、陸軍省は「銃後国民の士気を昂揚することなどを企図して、「同郷在住の画家」に「郷土部隊戦闘記録画」を描かせることとなった。滋賀県からは恵泉が派遣されることとなり、「今回の壮途を激励し後顧の憂なく此の光荣ある重大使命を完遂せしめ」ることを期して、「西田恵泉画伯従軍後援会」が設立されたのである。

この会は、従軍中の家庭の保護を主な目的とし、発起人には大宝村村会議員や同村長、滋賀県議会議員や在郷軍人会分会長を歴任した医師の西田太一郎(1876～1954)など、近郷の人々が名を連ねている。

・餞別帳 1冊

11.7 cm × 31.5 cm

昭和 18 年(1943)

個人蔵

従軍画家としてフィリピンに派遣された恵泉は、昭和 18 年(1943)8 月 25 日の夜に郷里を
ち、27 日に宇品港(広島県)を出航した。その後、フィリピン・ルソン島で半年間過ごすこととな
る。

本資料は、出発に際して受け取った餞別をまとめたもので、近郷の人々や、県内在住の画家
が名を連ねている。

・西田太一郎書簡 1通

14.0 cm × 9.0 cm

昭和 18 年(1943)8 月 25 日

個人蔵

昭和 18 年(1943)8 月 25 日、恵泉が従軍画家として郷里を経たことを、従軍後援会の会員
らに知らせるための挨拶状。

差出人として名のある西田太一郎(1876～1954)は、栗太郡大宝村(現在の栗東市)の
生まれで、大宝村村会議員や同村長、滋賀県議会議員や在郷軍人会分会長を歴任した人物
である。恵泉の従軍後援会にも、発起人として名を連ねている。

恵泉とその周辺

昭和初期の滋賀県には、全県的な広がりをもつ画家の集まりは存在しなかった。

恵泉は日本画家によるグループを組織する一方で、県下の画家が日本画、洋画を問わずに参
画し得る画壇の形成を目指していた。昭和 13 年(1938)頃にはこうした集まりを発意し、蒲生郡桜
川村出身の洋画家野口謙蔵との間でやり取りを行っている。滋賀県全域を対象とする画壇(湖国
画壇)の組織化は、「近江美術家聯盟」という形でひとまず結実することとなる。

一方で、日に日に戦時色が濃くなる中、芸術家たちも戦時体制とは無関係にはいられなかった。
絵筆(彩管)を執って国に尽くす「彩管報国」という理念の下、多くの画家たちが戦地に派遣され、
戦争記録画が作成された。

恵泉もまた、フィリピンへと派遣されることとなる。

・滋賀県日本画同志会 設立趣意 1枚

17.1 cm × 34.1 cm

昭和 14 年(1939)

個人蔵

昭和初期の滋賀県には、全県的な広がりをもった画家の集まりは見られなかった。

昭和 14 年(1939)5 月に滋賀県日本画研究会を発足させた恵泉は、同年 6 月には、神崎郡北五箇荘村の川島浩、犬上郡日夏村の寺島白耀、甲賀郡水口町の南耕平らと滋賀県日本画同志会を結成する。

滋賀県内在住の京都市立絵画専門学校卒業生からなる本会は、「わが山紫水明の湖国に在住の吾等はその数多き史跡を訪ね大湖に平野に画題をさぐることは最も欣快とする所でありわが滋賀県画人の責務」とし、「同人の研究作品を随時展覧発表して大いに湖国を天下に語り日本画の向上発展を図」ることを目的とするものであった。

・近江美術人会 第二回新作日本画小品展 出品目録 1 枚

16.4 cm × 32.0 cm

昭和 16 年(1941)

個人蔵

滋賀県日本画同志会などの集まりを経て、昭和 15 年(1940)1 月には滋賀県出身の日本画家 11 名による近江美術人会が結成された。会員は、恵泉のほか、岩本周濤、中野芳樹、上田道三、野添平米、古谷一晁、寺島白耀、斎藤紫山、木下青陽、南畊平人、柴田晩葉で、のちに川村虹橋、中川亨、村田一経、小林翠溪、北川蒼洋、疋田春湖、疋田光雲が参加している。

本会は、「絵画が精神文化の上に重要な役割をもつべきものであるとの信念のもとに、あくまで芸術的に、真剣を失はず、奇を追はぬ」ことを目標とし、展覧会を 2 回開催している。

・淡心会 近作日本画展チラシ 1 枚

17.2 cm × 34.0 cm

昭和 17 年(1942)

個人蔵

昭和 17 年(1942)3 月、恵泉、上田道三、野添平米、斎藤紫山、木下青陽によって、淡心会が結成され、大阪大丸において淡心会近作日本画展を開催している。

なお、淡心会の活動は戦後しばらく休止されるが、昭和 51 年(1976)には再び、淡心会近作日本画展が開催されている。

・官幣大社近江神宮 近江風景展覧会 出品目録 1 枚

18.1 cm × 26.0 cm

昭和 15 年(1940)

個人蔵

滋賀県内の日本画家によるグループが相次いで発足していく中、日本画、洋画の枠を越えた集まりも生まれようとしていた。

昭和 15 年(1940)9 月、紀元 2600 年に際して近江神宮が鎮座したことを記念して開催された「近江神宮奉賛美術展」には、日本画、洋画を問わず県内の画家が出品した。恵泉は、野口謙蔵(1901～1944)らとともに、この展覧会の発起人に名を連ねている。

この展覧会の開催を契機に結成されたのが、「近江美術家聯盟」である。近江美術家聯盟の主な活動は近江神宮奉賛美術展の開催であり、奉賛展は第 4 回展まで開催された。

・近江美術家聯盟規約、近江美術家聯盟幹事申込書 各 1 枚

18.1 cm × 30.8 cm、17.2 cm × 38.8 cm

いずれも昭和 15 年(1940)頃

個人蔵

近江美術家聯盟は、近江神宮奉賛美術展の開催を契機に結成された。その目的を「近江神宮御祭神ノ御聖徳ヲ景仰シ美術文化ノ向上ヲ期スルヲ以テ目的トス」し、会員は「近江関係ノ美術家ニシテ本聯盟ノ主旨ニ賛成スル者ヲ以テ組織」されていた。

日本画、洋画を問わず、全県的に広く会員を募る近江美術家聯盟のありかたは、恵泉が早い段階から目指していたものでもあった。恵泉は昭和 13 年(1938)頃にはこうした集まりを発意し、野口謙蔵との間でやり取りを行っている。

・野口謙蔵書簡 1 通

19.7 cm × 51.6 cm

昭和 13 年(1938)12 月 5 日

個人蔵

昭和初期の滋賀県には、全県的な広がりをもった画家の集まりは見られなかった。恵泉は日本画家によるグループを組織する一方で、県下の画家が日本画、洋画を問わずに参画し得る画壇の形成を目指していた。

恵泉は、この思いを洋画家野口謙蔵(1901～1944)に伝え、「研究会」結成のためのやり取りを行っている。2 人の間には、グループに対する思いの違いはあったようであるが、滋賀県全域を対象とする画壇(湖国画壇)の組織化は、「近江美術家聯盟」という形でひとまず結実したの

である。

・野口謙蔵書簡 1通

19.5 cm × 81.8 cm

昭和 18 年(1943)4 月 17 日

個人蔵

太平洋戦争が開戦し、日に日に戦時色が濃くなる中、芸術家たちも戦時体制に組み込まれていくこととなる。

昭和 18 年(1943)には、県内在住の芸術家たちによって組織される滋賀県文化芸術報国会が結成された。同年 4 月 17 日の野口謙蔵の書簡によれば、本会の結成は野口謙蔵が主導し、日本画部委員の人選については恵泉に一任されたようである。

本会は、のちに大政翼賛会滋賀県支部内滋賀県芸術文化報国会絵画部会となり、昭和 19 年(1944)6 月には野口謙蔵を会長、恵泉を副会長に決定する。会長以下の人選が、発足からおよそ 1 年を経て決定された背景には、恵泉が従軍画家として派遣されたという事情があった。

・野口謙蔵書簡 1通

19.5 cm × 81.8 cm

昭和 18 年(1943)8 月 24 日

個人蔵

日中戦争から太平洋戦争期にかけての日本では、絵筆(彩管)を執って国に尽くす「彩管報国」という理念の下、多くの画家が戦地に派遣され、さまざまな戦争記録画が描かれた。

昭和 18 年(1943)、戦争記録画の作成を決定した陸軍省から画家の推薦依頼を受けた滋賀県は、まず野口謙蔵に打診する。しかし、野口謙蔵が病気などを理由に辞退したため、滋賀県は恵泉に交渉し、その結果恵泉が派遣画家として推薦されたのである。

この書簡は、恵泉が戦地へ向けて出発する前日の昭和 18 年 8 月 24 日に、野口謙蔵から恵泉に宛てて出されたもの。25 日夜に郷里を発った恵泉は、27 日に宇品港(広島県)を出航。フィリピン・ルソン島で半年を過ごし、昭和 19 年(1944)3 月 2 日に帰国している。

・野口謙蔵書簡 1通

14.0 cm × 9.0 cm

昭和 19 年(1944)4 月 9 日

個人蔵

恵泉が無事に帰国したことを喜び、野口謙蔵からの書簡。

戦時色が濃厚となる中、画家たちも「彩管報国」の理念の下で戦時体制に組み込まれていったが、彼らの意識の根底にはあくまでも「画作の追求、文化の向上」があったと言われている。この書簡でも、「色々の御画材を携へて」という文言があり、「従軍画家」に対する当時の画家たちの認識をうかがうことができる。

昭和 18 年(1943)の暮れから病床にあった野口謙蔵は、帰国の挨拶に訪れた恵泉に、「あなたが従軍で万一の事があつたら私の責任が重くなると思つて心配してました」と語ったという。

・野口謙蔵書簡 1 通

14.0 cm × 9.0 cm

昭和 19 年(1944)5 月 23 日消印

個人蔵

野口謙蔵から恵泉に宛てた書簡のうち、現存する最後の 1 通。

野口謙蔵と恵泉が中心になって昭和 18 年(1943)に結成された滋賀県文化芸術報国会は、のちに大政翼賛会滋賀県支部内滋賀県芸術文化報国会絵画部会となり、恵泉の帰国後の昭和 19 年(1944)の 6 月には野口謙蔵を会長、恵泉を副会長に定めた。この書簡は、会長以下の陣容が定まる直前のもので、滋賀県の画壇をリードした野口謙蔵の同部会への思いを物語る。

野口謙蔵は、会長に就いて 1 ヶ月後の同年 7 月 5 日に他界する。これに伴って恵泉は会長に就任することとなった。

・滋賀県文化報国会部会長名簿、滋賀県芸術文化報国会絵画部会々則 各 1 枚

25.9 cm × 36.5 cm、26.6 cm × 18.6 cm

いずれも昭和 19 年(1944)か

個人蔵

昭和 18 年(1943)に結成された滋賀県芸術文化報国会は、大政翼賛会滋賀支部に属していた。その絵画部会は野口謙蔵を会長とし、昭和 19 年(1944)7 月に野口が亡くなると、副会長の恵泉が会長となった。

本会は、「彩管報国ヲ念トシ絵画ニ依リ戦意ノ昂揚ヲ図」り、「国民文化ノ推進ニ努メ」ることなどを目的とした。「展覧会ノ開催、記録画等ノ作製」等の事業を行ったほか、色紙を配布する慰問活動を行い、「皇国標準農村」に指定された栗太郡葉山村等の村々を巡回し、食糧増産活動の様子を描いている。

戦地の風景

恵泉が派遣されたフィリピンは、日本軍の占領下にあった。日本軍占領前のフィリピンはアメリ

カ領であったが、昭和 21 年(1946)をもって独立することが内定していた。

昭和 16 年(1941)12 月 8 日の太平洋戦争緒戦にあたるフィリピンの戦いは、翌 17 年 5 月 10 日まで続いた。昭和 16 年 12 月 22 日、日本軍はルソン島に上陸、翌年 1 月 2 日に首都マニラを占領した。これに対して、米軍司令官マッカーサー大將はバタアン半島に立てこもった後、コレヒドール島に移った。マッカーサーが大統領命令によりアメリカ本土に帰国すると、ウェインライト中將が後任となった。しかし、4 月 3 日以降、バタアン半島、コレヒドール島は立て続けに陥落、戦いは一応の終結を迎えた。

惠泉スケッチには、この戦いの記憶を記録するために現地に派遣されたことが端々にうかがえる。

・輸送船と船団 1 枚

西田惠泉筆 紙・水彩 56.0 cm × 74.5 cm

昭和 18 年(1943)8 月 27 日

個人蔵

宇品港(広島)から出航する直前のスケッチである。裏面に「輸送船瑞祥丸(英国製) 貨物船に兵約百名」とある。陸軍省検閲印(19.4.15 付)。惠泉整理番号「1」。(惠泉整理番号は全て昭和 50 年頃か。)

・ルソン島中央部を望む(夕) 1 枚

西田惠泉筆 紙・水彩 31.5 cm × 38.7 cm

昭和 18 年(1943)9 月 9 日

個人蔵

航海 14 日目。任地のフィリピン・ルソン島周辺に至り、船上より頻繁にスケッチを行う。同日のスケッチが数点ある。惠泉整理番号「8」。

・マニラ湾より西を望む 1 枚

西田惠泉筆 紙・水彩 38.5 cm × 63.0 cm

昭和 18 年(1943)9 月 12 日

個人蔵

ルソン島中心部に位置する首都マニラに入港した時のスケッチ。船上から西を望み、右にバタアン半島、左にコレヒドール島をとらえる。陸軍省検閲印(19.4.15 付)。惠泉整理番号「17」。

・アチモナン上陸地 1 枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆・水彩 38.3 cm × 63.2 cm

昭和 18 年(1943)

個人蔵

昭和 16 年 12 月 22 日、日本軍はルソン島各所から首都マニラにむかって上陸した。南西部のラモン湾からも数箇所に分かれて上陸した。陸軍省検閲印(19.4.15 付)。恵泉整理番号「1」。

・シャイン上陸地 1 枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆・水彩 38.4 cm × 62.9 cm

昭和 18 年(1943)

個人蔵

昭和 16 年 12 月 22 日、日本軍はルソン島各所から首都マニラにむかって上陸した。南西部のラモン湾からも数箇所に分かれて上陸した。陸軍省検閲印(19.4.15 付)。恵泉整理番号「2」。

・マウバン上陸地 1 枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆・水彩 38.5 cm × 124.5 cm

昭和 18 年(1943)

個人蔵

昭和 16 年 12 月 22 日、日本軍はルソン島各所から首都マニラにむかって上陸した。南西部のラモン湾からも数箇所に分かれて上陸した。陸軍省検閲印(19.4.15 付)。恵泉整理番号「3」。

・ピース附近戦車 1 枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆・水彩 38.5 cm × 83.3 cm

昭和 18 年(1943)

個人蔵

緑生い茂る風景の中、道端にはいくつもの戦車が残されている。これらは米軍が置いていった戦車である。陸軍省検閲印(19.4.15 付)。恵泉整理番号「4」。

・アンヘレス 1 枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆・水彩 31.5 cm × 53.0 cm

昭和 18 年(1943)10 月 15 日

個人蔵

軍馬たちの育成施設。アンヘレスでは 3 日間ほど滞在していることを確認できる。その期間中、建物の焼け跡などもスケッチしている。恵泉整理番号「9」。

・タルラック アカシヤ並木 1 枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆・水彩 38.3 cm × 63.0 cm

昭和 18 年(1943)10 月 24 日

個人蔵

アカシア並木と部隊長戦死の木碑がある。中央にあるアカシアの巨木の根元附近に小さな木碑がある。木碑には「上島部隊長戦死」とある。陸軍省検閲印(19.4.15 付)。恵泉整理番号「10」。

・バランガより 1 枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆・水彩 37.9 cm × 90.4 cm

昭和 18 年(1943)10 月 30 日

個人蔵

バランガの民家を描く。バランガはバタアン半島の州都である。民家の周辺には南国特有の植物が生い茂り、鶏も歩いている。恵泉整理番号「14」。

・バタアン半島東西横断道路 1 枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆・水彩 68.4 cm × 83.8 cm

昭和 18 年(1943)10 月 10～19 日

個人蔵

半島東部のバランガより西部のバガックへ抜ける道。途中にある橋は山川橋と呼ばれる。バタアン半島の大半は緑深いジャングルにおおわれている。陸軍省検閲印(19.4.15 付)。恵泉整理番号「15」。

・リマイ海岸 1 枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆・水彩 20.6 cm × 88.2 cm

昭和 18 年(1943)11 月 21 日

個人蔵

半島東南部に位置するリマイ海岸。海岸越しに雄大なマリベレス山を望む。海岸には戦中の遺留品らしきものがある。陸軍省検閲印(19.4.15 付)。恵泉整理番号「20」。

・カプカーペン 1枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆・水彩 38.1 cm × 68.0 cm

昭和 18 年(1943)11 月 22 日

個人蔵

「本間・ウエンライト両将会見の処」と題される。本間雅晴・ウェインライトは、当時の日米両軍の総司令官。この屋舎は、降伏したウェインライトが本間との会見に臨んだ場所。恵泉整理番号「19」。

・ラマオ 1枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆・水彩 49.2 cm × 77.5 cm

昭和 18 年(1943)11 月 23 日

個人蔵

半島東南部の港町。恵泉は、ここからコレヒドール島に向かった。陸軍省検閲印(19.4.15 付)。恵泉整理番号「21」。

・コレヒドール全景 1枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆・水彩 20.6 cm × 74.0 cm

昭和 18 年(1943)11 月 23 日

個人蔵

コレヒドール島はマッカーサー元帥が日本軍の対抗拠点とした地である。ラマオより乗船して、その全景を望む。陸軍省検閲印(19.4.15 付)。恵泉整理番号「22」。

・コレヒドール給水台 1枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆・水彩 38.0 cm × 115.1 cm

昭和 18 年(1943)11 月 25 ~ 26 日

個人蔵

高所に給水台があり、その周辺一帯に焼き枯れた樹木が広がる。左奥には、海上を進む船影が見える。陸軍省検閲印(19.4.15 付)。恵泉整理番号「23」。

・コレヒドール上陸地点 1枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆・水彩 30.8 cm × 58.7 cm

昭和 18 年(1943)12 月 1 日

個人蔵

画面中央に「戦車上陸」と書入れる。コレヒドール島にはアメリカ軍の大砲陣地があったが、上陸前には破壊されていたという。陸軍省検閲印(19.4.15 付)。恵泉整理番号「27」。

・マリベレス山の温泉 1 枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆・水彩 47.7 cm × 73.7 cm

昭和 18 年(1943)12 月 4 日

個人蔵

コレヒドール島からバタアン半島に戻るとマリベレスに滞在した。マリベレス山上には温泉があり、日本兵たちの憩いの場となっていた。陸軍省検閲印(19.4.15 付)。恵泉整理番号「28」。

・レガスピー海岸とマヨン山 1 枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆・水彩 38.0 cm × 116.8 cm

昭和 18 ~ 19 年(1943 ~ 1944)

個人蔵

レガスピー海岸は昭和 16 年 12 月 22 日の上陸地のひとつ。この海岸からマヨン山を見た風景で、マヨン山は「ルソン富士」と称された。陸軍省検閲印(19.4.15 付)。恵泉整理番号「33」。

・バランガ風景下絵 1 枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆 48.5 cm × 51.0 cm

昭和年間

個人蔵

恵泉整理番号「14」の「バランガより」を典拠とした画稿。画面の右下には「恵泉」とあり、本画制作の下絵として描いたのであろう。

・牛に乗る少年下絵 1 枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆 46.9 cm × 47.1 cm

昭和年間

個人蔵

整理された筆線は、この図が完成画に限りなく近い成熟した段階にあることを示している。

・フィリピン風景下絵 1枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆・水彩 34.2 cm × 74.9 cm

昭和年間

個人蔵

描かれる人物や植物には、それぞれに個別のスケッチが確認できる。屏風の小下絵として描かれたものであろう。

兵士のすがた

風景画を得意とした西田恵泉にとって、戦地の風景を描くことは、陸軍省囑託の従軍画家としての第一の任務であったものと思われる。これと同等に重んじたのは同郷の兵士たちのすがたを描くことであった。

大きな戦いは一段落したとはいえ、以後もアメリカ・フィリピン軍の残党を中心に、国を取り戻そうとするゲリラ的活動が継続しており、日本軍はその対処にあたっていた。恵泉は、自身の帯同した部隊における敵部隊との交戦の記録を克明に記している。また、兵士たちのスケッチには、戦闘中の様々な表情をとらえている。

恵泉は、現地の風景画や交戦記録、兵士たちのスケッチをもとに、一枚の大下絵を制作した。完成画となったのかは不明であるが、この大下絵には、従軍画家の眼に焼き付いた光景が鮮明に再現されている。

・軍用車で移動する兵士たち 1枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆 19.1 cm × 26.4 cm

昭和 18～19 年(1943～1944)

個人蔵

軍用車の荷台に乗って移動する兵士たちを後方から素早くスケッチする。なお、裏面には頭に荷を乗せて移動するフィリピン人をスケッチする。

・兵士像 1枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆・水彩 29.8 cm × 20.6 cm

昭和 18～19 年(1943～1944)

個人蔵

左手は軽く拳を作るように膝におき、右手には銃を突き立てる。擬装用の木の葉を全身に覆

ったすがたは、臨戦中のものである。

・大尉像 1枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆・水彩 29.8 cm × 20.7 cm

昭和 18～19 年(1943～1944)

個人蔵

左手に双眼鏡を持ち、右手は人差し指で進む方向を差し示している。行軍中の様子をスケッチする。また、「デブプリ肥エテ居ラル頭髮ヒゲ白毛アリ」と注記する。

・交戦記録 1枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆 21.6 cm × 27.8 cm

昭和 18 年(1943)

個人蔵

樹木のもとに砲隊鏡・観測鏡が置かれ、数名の兵が配置する。「青木」は負傷して倒れ込み、「部隊長」は右腕を抱えている。

・部隊長を手当てする兵士 1枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆・水彩 21.6 cm × 27.8 cm

昭和 18 年(1943)

個人蔵

右腕部を負傷した「部隊長」は、昭和 18 年 10 月 24 日の「タルラック アカシヤ並木」に建てられる木碑の人物と同一であろう。

・タルラックの交戦記録 1枚

西田恵泉筆 紙・ペン 20.6 cm × 29.8 cm

昭和 18 年(1943)12 月 30 日

個人蔵

水無川沿いのアカシヤ並木附近に日本兵が布陣。敵兵より射撃があり、樹木の枝に当たった砲弾が炸裂すると、アカシヤの木が道路に倒れた。根元で地雷が爆発し、戦死者 3 名と負傷者も出たと記録する。

・兵士スケッチ類 10 枚

西田恵泉筆 紙・鉛筆(・水彩) (縦 最大)18.6～31.3 cm (横 最大)21.7～28.9 cm

昭和 18 年(1943)

個人蔵

アカシア並木の戦いは恵泉従軍中に記録した数少ない戦闘であったのだろう。様々なすがたの兵士がスケッチされている。

・アカシア並木の戦い 1 枚

西田恵泉筆 紙・木炭 78.8 cm × 108.1 cm

昭和年間

個人蔵

「タルラック アカシヤ並木」や「交戦記録」、「兵士スケッチ類」をもとに描かれた大下絵。木炭で丁寧に素描されており、描かれた光景を脳裏に鮮明に浮かび上がらせる。恵泉整理番号「11」。

特集展示「平和のいしずえ 2012～描かれた戦争～」

栗東歴史民俗博物館

平成 24 年 7 月 28 日～平成 24 年 9 月 2 日

滋賀県栗東市小野 223-8

077-554-2733

hakubutsukan@city.ritto.lg.jp